

【講演】

ダンテ、レーヴィ、ヒューマニズム

ハーヴァード大学附属ルネサンス研究所ヴィッラ・イ・タッティ所長

リーノ・ペルティレ

(訳：多賀健太郎)

プリーモ・レーヴィの『これが人間か』には、以下のような詩節がエピグラフとして掲げられています。

これが人間かどうか考えてみてほしい
泥まみれで働き
休息を知らず
パンのかけらを奪い合い
号令ひとつで生死を左右されるものが
これが女かどうか考えてみてほしい
髪を刈られ名も奪われ
もはや思い出す気力も失せて
目も虚ろに冬越えの蛙のごとく
体の芯まで凍えきっているものが^{*1}

^{*1} Primo Levi, *Opere*, a cura di Marco Belpoliti, introd. di Daniele Del Giudice, 2 voll., Torino, Einaudi, 1997, I, p. 3 [(訳者追記)『これが人間か』という原題は邦訳では以下のように改題されている。『アウシュヴィッツは終わらない——あるイタリア人生存者の考察』竹山博英訳、朝日新聞社、1980年、冒頭部分]。

このエピグラフは私たちに禍々しい問いをつきつけてきます。男といわず女といわず人間でありつづけるにはいったいどれほどの苦痛に耐えなければならないのか。人間性が破壊されてしまうような一線は、はたして存在するのか。いまだ完全に抹殺されてはいない人間でも、苦痛や収奪や恥辱によって踏み越えてしまうような一線が。人間の精神、こういってよければ、人間の魂といったものを剥奪され、生きのびることがもっぱらたんなる生理と化してしまうような、そんな一線が。要するに、肉体的な苦痛とは何なのか。また、そうした苦痛が私たちの心理にいったいいかなる影響を及ぼすのか。2つの地獄、すなわち、ダンテの『神曲』とレーヴィの『これが人間か』のなかでそれぞれ描写される、苦痛のシステムとしての地獄を糸口にしながら、私がここであらためて考えてみたいのは、こうした一連の問いについてなのです。

＊

ダンテの『地獄篇』の亡霊たちは、各自にわりあてられた行き先に着くと、ただちに神のヴィジョンを奪われてしまいます。そればかりか、ひっきりなしに肉体的苦痛に苛まれ、恒常的に傷つけられる対象になり下がってしまうのです。『天国篇』における愉悦と同様、地獄の苦痛はつねに新しく新鮮で生々しいものです。苦痛が習慣になり、馴れ合い薄まることは決して許されません。多くの亡霊たちは、彼らを待ちかまえている罰のことを思い恐怖に慄くことになります。

地獄の観念、そしてとりわけダンテ流の地獄観は、かなり昔から私たちの文化のなかに根づいています。そのため、私たちはダンテの地獄に慣れ親しみいくぶん軽く扱うきらいがあります。地獄の存在理由やその主要目的が何なのか、地獄に堕ちた者たちにありとあらゆる苦痛を科して罰することはいったい何なのか。ふだん私たちは、そうした疑問についてことさら深く考えようとはしません。ミシェル・フーコーは拷問の責め苦を際立たせることによって、ダンテが心に抱いていた概念の身の毛もよだつような法外さをまざまざと浮かび上がらせています。フーコーはこう述べています。拷問と刑罰はいずれも犠牲者の身体に加えられるものだが、その暴力の形態は別様である、と。拷問は犠牲者から自白を引き出すために行われる実践であり、そこでは肉体的苦痛は目的ではなく手段である。こうした手段に訴えることによって、拷問にかけている側からいわせれば犠牲者が知っているはずのことを、犠牲者に無理矢理白状させたり認めさせたりしようとする。それに対して、刑罰は拷問の公式の形態である。刑罰は、刑を宣告された者の死によってつねに完了する。とはいえ、刑罰の定めるところは、彼を殺害することではなく、彼を辱め貶めることにある。そこでは、とりわけ死ぬ前に彼の身体をできるかぎり筆舌に尽くしがたい苦痛に晒すことが肝心なのである。死刑執行人の腕の見せどころは、犠牲者を殺すことなく可能なかぎり最大の苦痛を与えるその手腕にある。なぜならいったん死んでしまえば、犠

犠牲者は罰や苦痛から、つまりは法の裁きから解放されてしまうからだ。死ぬのが早すぎた罪人は、その判決を免れた罪人なのだ。だからこそ熟練の死刑執行人は犠牲者の苦痛をできるだけ長引かせるのである*²。

そこで話題をダンテに戻しましょう。『地獄篇』には、フーコーによって記述された刑罰のほかならぬ理想的な姿が繰り広げられていることに気づきます。皮肉にも、ダンテの亡者たちは、すでに死んでいます。ですから、死ぬことで死刑執行人の手を逃れることは金輪際できないわけです。ダンテの地獄での処罰はけっして終わることのない刑罰です。そこでは罪深き身体に対する拷問や辱めは、いつ果てるともなく継続し、くりかえされます。刑罰の目的は、傷つけられた神の裁きを埋め合わせることにあります。ですが、創造主は被造物よりもかぎりなく上位にあるがゆえに、被造物はついで創造主を満足させることはできません。そのため、苦痛は永遠に続くのです。

地獄では苦痛が亡者に思い知らせる教訓など何ひとつありません。苦痛が彼らを成熟させたり解放させたりすることは皆無なのです。苦痛は彼らを肉体的に苦しめこそすれ、その魂をいささかも変えることはできないのです。それどころか、すっかり慣れっこになってしまった罪人すらいるほどです。彼らはどうやら神の怒りを買っては倒錯した快楽に耽っているようです。神の逆鱗に触れたために科され講じられるありとあらゆる苦悶を、彼らは(死刑執行人の手にかかった殉教者のように)嘲笑い愚弄しているほどなのです。「地獄をいたく嘲る [l'inferno a gran dispetto]」かのようなファリナータ (*Inf.* X 36)。「気の済むまで復讐を果たす喜び [vendetta allegra]」は俺からは断じて得られはしないだろうと傲然と云い放ち、罰するなら罰してみるとユピテルを挑発する憤怒のカパネウス (*Inf.* XIV 60)、「無花果の形をつくった両手の握り拳 [amendue le fiche]」を神に向かって突きあげるヴァンニ・フッチ (*Inf.* XXV 2-3) のことを思い浮かべてみれば充分でしょう。靈魂がまるで肉体を具えているかのように感じるという考え方に驚愕する人もいるかもしれませんが。そのような疑念にダンテは以下のように答えています。死は人間の心身の合一を分離させてしまうわけではない。むしろ肉体は、死によって魂から分離されるものの、それと同時に大気の身体によって置き換えられるのである。この大気の身体は、肉体とまったく同じように感じたり苦しんだりする。そして最後の審判の日に、魂は地上に置き去りにしてきた肉体とふたたび一つになる (*Purg.* XXV 70-108)。ダンテはその非凡な想像力によって人間を、魂と肉体が共存し絶え間なく相互作用するものとみなしています。その心身の合一は死後でさえも中断することがないのです。肉体がなければ魂は、感情や感覚や観念をもつことはないでしょうし、したがって苦しむこともできないのです。そのために肉

*² M. Foucault, *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Paris, Gallimard, 1975, pp. 36-72 [ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳、新潮社、1977年、37-74頁]。また、49頁 [邦訳50頁] でフーコーは体刑を「地獄の劇場 [théâtre de l'enfer]」と定義づけている。

体は、たとえ大気というかたちをとっていても、個体の死から復活までのあいだも生きつづけなくてはならないのです。なぜなら肉体は、生者の世界と死者の世界が触れ合い行き交う場であり、生きた境界であるからです。

それゆえ『神曲』によれば、神の裁きは容赦なく貫徹されます。地獄は筆舌に尽くせぬ恐怖の総覧図です。とはいえ、飢えや病でやつれ果てた肉体、敵の刃にかかって深手を負った肉体、死刑執行人によって公共の広場で八つ裂きに切り刻まれ焼かれた肉体を眺めることに慣れていた当時のダンテの読者にとって、そこに何ら幻想味はありません。それでも、生命の恐怖には死というたしかな慰めがあります。地獄の恐怖ではそうはいきません。ダンテが浪費家ラーノ・ダ・シエナを登場させている箇所は、『地獄篇』全体のなかでも指折りの背筋の凍る場面の一つです。ラーノは丸裸のまま死物狂いで逃げまどいながら「さあ来たれ、来たれ、死よ [Or accorri, accorri, morte!]」と喚いているのです (XIII 118)。いうまでもなく彼は死んでいます。しかし、彼の恐怖は全き死を懇願するほどのもののなのです。彼は無に帰すことを望んでいます。それどころか、彼は、キリスト教がその信者にもたらした最大の慰めにして、もっともおぞましい恩恵と葛藤をくりかえしているのです。それとはつまり、人間存在の絶対的な不滅性です*³。

こうした教訓に富んだ宗教的なテーマをめぐる詩を書いた点に、ダンテのなみなみならぬ新しさがあります。詩はその主題を変えています。変わらないのは罪の重さについての判断です。身の毛もよだつ罰は私たちが知っているのと変わらないか、あるいはそれを上回ってすらいいます。とはいえ、伝統的な苦痛の描き方にくらべれば見違えるような変化がみてとれます。罪人の拷問はもはや詩人の注意を惹く唯一の対象でもなければ主たる関心でもありません。むしろ、重要なのは罪人自身なのです。詩人の眼下で、より正確を期するならば、詩人の筆遣いの下で、彼らは、苦痛に喘ぐ悲劇的で多面的な人格として姿を現わしています。ダンテは教会の教義を受け継いでいます。たとえば異端者や男色家は、そうした教義からすれば、神に疎まれていたのです。ダンテは、火焰を噴く墓のなかに異端者を閉じ込めて罰します。また、男色家は、火の粉が雨霞と降り注ぐなか焼けつくような灼熱の砂の上を未来永劫歩きつづけるという罰に処せられています。ところが、詩人ダンテはこうした罪人たちを刑に服させつつも、彼らを匿名の対象に貶めたり、その人間性を剥奪したりしているわけではありません。彼らのかけがえのない生きた個性を守り、むしろ公然とそれをあばき出そうとするのです。結局のところ、罪人は、登場人物としてのダンテや読者／観客としての私たちが、親近感や反感、共感や憎悪、崇敬や軽蔑といった

.....
*³ Cfr. E. Auerbach, *Mimesis: il realismo nella letteratura occidentale*, Torino, Einaudi, 1956, p. 218 (「キリスト教の言う完全な人間の不滅性」[邦訳『ミメシス——ヨーロッパ文学における現実描写』篠田一士・川村二郎訳、ちくま学芸文庫、上巻 340 頁])、および p. 220 (「歴史のなかにおかれた個としての人間の不滅性」[同書 343 頁])。

関係を結ぶ個人、つまりは、私たちが生きている人々と結ぶのと何ら変わらない関係を結んでいる個人なのです。罪人が地獄の門をくぐりながら読む銘「汝こゝに入るもの一切の望みを棄てよ [Lasciate ogni speranza voi ch'entrate]」[Inf. III 9] は、彼らの罪業が永劫にわたって消えず、地獄にあっては恩寵も贖罪も救済も施されはしないことを罪人に想い起させるものです。しかし、希望が潰えたからといって、罪人の情念が消えるわけでも冷めるわけでもありません。また、罪人が甘受する責めさいなむような苦悶が彼らの人間性を破壊してしまうわけでもありません。むしろ肉体の死後、肉体を生前鼓舞していた情念はひときわ強く鮮明になるのです。まさしくこれこそが、ダンテの「リアリズム」について言及される際に含意されていることなのです。

＊

それでは、プリーモ・レーヴィの『これが人間か』に話題を転じましょう。ナチスの強制収容所はしばしばダンテの地獄と比較されてきました*⁴。それどころか、ダンテの地獄がほかならぬこうした収容所を準備していたとすら語られています。ほぼ 40 年前に出されたある有名な論文のなかでジョージ・スタイナーはこう書いています。

強制収容所は、12 世紀から 18 世紀にかけてヨーロッパの芸術や思想に現われた地獄のイメージや年代記をしばしばその細部にいたるまで刻明に具現化している。ベルゼンの戦慄すべき狂気にいわば「エクスベクテイド・ロジック論理の先取」をもたらしたのは、まさにこうした地獄絵図であった。人間事とは思えない凄惨な現実、トルチェッロ島のモザイクからヒエロニムス・ボスの板絵にいたるまで西欧の図像のなかでいくどとなく題材に選ばれ、微に入り細に入り描かれてきた。[……] 意味なき苦痛、とどまることを知らぬ残忍性、いわれなき恐怖のテクノロジーが見出されるのは、西欧の感性に文字どおり亡霊のようにつきまとっているこうした地獄の幻想においてなのである。600 年にわたる西欧の想像力から思い浮かべられる光景は、焼却炉の鼻をつくような悪臭が立ちこめるなか、笞打ちの音が轟き地獄の番犬がたむろ屯するような場所で、皮を剥かれ、車刑に架けられ、嘲笑される地獄の亡者たちの姿である。

収容所に関する文献は膨大にある。しかし、ダンテの完璧な観察眼に匹敵するような作品はひとつもない。[……] いかなる体制下であれ、いたるところに実在する 20 世紀の強制収容所、死の収容所は、内化された地獄である。地下から地表へと移設された地獄なのである。長い歳月にわたって培われた精密な想像力の実現であり実行なのである。『神曲』は、他のあらゆるテキスト以上にこのことを徹底的に想像し尽くし、西欧の秩序の核に地獄があることを示している。その意味で『神曲』

.....
* 4 これまでの浩瀚な文献一覧が付されている François Rastier, *Ulysse à Auschwitz. Primo Levi, le survivant*, Paris, Cerf, 2005 のとくに 101-104 頁を参照。

は、焼却炉の炎、抑留者の氷原、屠殺された人肉の吊り^{かぎ}鉤へとわれわれを案内する、文字どおりのガイドブックでありつづけている*⁵。

スタイナーの論述の核は2点あります。第一に、「常軌を逸した状況、想像力への挑戦、恐怖の度合、そこから惹き起こされる戦慄を覚えずにはいられない諸問題」*⁶といった点で、ダンテの地獄と強制収容所には形式上の類似があるということ。第二に、強制収容所は、西欧世界に根を下ろし広汎に流布している幻想を具体的に実現したもので、ダンテはその恰好の事例を提供しているということです。

最初の点に関していえば、私には類似よりも差異のほうから教えられることがはるかに多いように思われます。というのも、類似が両方の主題の細部に関わるのに対して、差異とは主題の本質に触れるものだからです。まずはじめに、ダンテの地獄を含めて地獄というものは、悪人を処罰し善人に報いる秩序側として存在しています。ですから、この地獄は西欧文化であまねく共有されている公正の観念に依拠しているわけです。なるほどたしかに、こうした公正がそれに背いた者たちに科す罰は残忍きわまりないもので、一部には法外と感じる人もいるかもしれません。けれども、その罰は恣意的なものでも無分別なものでも不可解なものでもないのです。逆に、強制収容所は、善人であれ悪人であれ、人間を殲滅するためにもっぱら考案された機構です。その唯一の目的は、ハンナ・アーレントの言い回しを借りれば「屍体製造」です*⁷。強制収容所は誰かに何かを教えるために存在するわけではありません。強制収容所には外から与えられる目的も世界とのつながりも一切ありません。新入りにとって収容所は理解も解読もできないように思われるのです。それは、公正も不正も、善も悪も、友も敵も、「われわれ」も「彼ら」も、もはや線引きされない世界なのです*⁸。この世界の中心には、人間に対する人間の非人道性があるのです。

*⁵ George Steiner, *In Bluebeard's Castle. Some Notes Towards the Redefinition of Culture*, New Haven CT, Yale University Press, 1971, pp. 54-55 [邦訳『青鬚の城にて——文化の再定義への覚書』桂田重利訳、みすず書房、1972年、58頁]。

*⁶ 『地獄篇』の英訳者であるアメリカの詩人ロバート・ピンスキーはある対談でそう述べている (Robert Pinsky, «The Jewish Exponent», 19 giugno 1997, p. 1x)。ピンスキーはつづけてこうも語っている。「でも、忘れてならないことはこうした類似の瑕疵のことです。霊魂は公正のシステムによって地獄に配置されているのに対して、強制収容所では霊魂は不正のシステムによって配属されているのです」。

*⁷ Hannah Arendt, *Essays in Understanding, 1930-1954*, a cura di Jerome Kohn, New York: Harcourt, Brace & Co., 1994, p. 13 [邦訳『アーレント政治思想集成 1 組織的な罪と普遍的な責任』斎藤純一・山田正行・矢野久美子訳、みすず書房、2002年、20頁]。なお、この点については、Giorgio Agamben, *Quel che resta di Auschwitz. L'archivio e il testimone*, Torino, Bollati Boringhieri, 1998, p. 65 [邦訳『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳、月曜社、2001年、93-94頁]を参照。

*⁸ Primo Levi, *I sommersi e i salvati*, in *Opere*, II, pp. 1018-1019 [邦訳『溺れるものと救われるもの』竹山博英訳、朝日新聞社、2000年、35頁]。

強制移送された人々が無益にむごく屈辱的な状況下に置かれた長くつらい旅路の末にアウシュヴィッツに到着すると、彼らは「この世のものとも思えない空間の暗黒と恐怖の瀬戸際に」いるように感じます*⁹。彼らが足を降ろした地には、もっとも基本的な人権すらなくなってしまっているのです。彼らに罪はありませんし、そこで命を断たれる論理的な根拠は一切ありません。生きているがゆえにそこで殺されるのです。一方、ナチス側の意向からすれば、彼らは死者でなければならず、地上から抹殺されなければならないというのです。彼らをそこまで移送したとすれば、それはまさしくそこで一掃するためだったのです。強制収容所の重箱の隅をつつくような無数の規則はどれも、ひとえにより迅速に計画どおり粛々と大量処刑を執行するためのものなのです。

つまりは、到着という侮辱的な通過儀礼をひとたび経てしまえば、強制移送されたおびただしい数の人々は、ガス室送りになるのです。健康で有用な一部の者は、一時的に特赦を受け人間以下の境遇で強制労働に従事させられます。このわずかな者たちのうち、ごく一握りの人々——より頑強で幸運に恵まれた人々、より残酷で破廉恥な人々——のほうが他の人々——運に見放された温和で従順な無抵抗の人々——よりも長く生き延びるのです。そうした従順な人々は、重労働、殴打、寒さ、飢え、渇き、病気、共同獄舎の劣悪な環境によってすぐに、いわゆる回教徒の状態に逐いこまれ、ガス室へと送られてしまいます。

回教徒とは、一切の感覚、苦痛すらも感じなくなった人間、人間ならざるものです*¹⁰。回教徒は、収容所における極限的な生の現われであり、レーヴィが「解体」と呼ぶ組織的なプロセスの最終結果にほかなりません。人間を解体するとは、人間からそのかけがえのない個性を剥奪することです。人間をたんなる生物学的な存在、「生ける死者」もしくは「生ける屍」に還元してしまうことなのです。こうした結果を手っ取り早く得るために、被抑留者をたえず想像を絶するような拷問にかけるだけでなく、彼が築いた社会的、身体的、心理的なアイデンティティを形成するあらゆる基盤を剥奪していくのです。家族、交友、家屋、習慣のみならず、衣類や履物、髪や名前を含むありとあらゆる持ち物が奪われ、数字に置き換えられるのです。収容所は囚人を抜け殻にしてしまいます。一切の尊厳を忘れた欲求だけの存在にしてしまうのです。そこまで獣と化した存在ならば、どんな罰や卑劣

*⁹ *I sommersi e i salvati*, in *Opere*, II, p. 1029 [同書 52 頁]。

*¹⁰ 「私の記憶には彼らの顔のない姿が焼きついている。現代の悪という悪のすべてをひとつのイメージに封じ込められるとすれば、私は自分には見慣れたイメージを選ぶことだろう。やつれ果て、頭を垂れて、背中を丸める、その表情にも目にも思考の痕跡をまったく読みとることのできない人間というイメージである」。レーヴィは『これが人間か』の「溺れるものと救われるもの」と題された一章で回教徒をこのように描いている (*Opere*, I, p. 86 [前掲書 107 頁])。レーヴィはのちに 1986 年になってこの章題と同名のタイトルを付した書を上梓し、その第 3 章であらためて回教徒のことを論じている (1055-1057 頁 [前掲書 93-95 頁])。

な行為も甘んじて受けることでしょう。飢えや渇きや苦痛以外のものを望んだり感じたりできなくなるために、自己の主体性の感覚を完全に喪失してしまうからです。そうなのは、苦しむこともできないために、もはや人間とは思われず、囚人は蚊を叩き潰すように微塵の躊躇いもなく殺害され——射殺され、撲殺され、絞殺され、窒息させられ、火炙りにさせられ——ることになります。ハンナ・アーレントが述べているように、死の収容所の核をなす存在論的な恐怖は、大量殺戮というよりもむしろ、かけがえのない個人を総力を挙げて剥奪するという点にあるのです*¹¹。

＊

それでは、ダンテ・アリギエーリによって描かれた中世後期の監獄に話題を戻し、それをプリーモ・レーヴィによって描写された絶滅収容所と比較してみることにしましょう。比較されるべきこの両者のあいだに、自明であるとはいえ事前に区別をつけておくことが肝要です。ダンテが描く「現実」は、虚構、幻視、悪夢であり、そのなかで詩人ダンテは神の審判が下されるさまを想像しているのです。私たち読者はこの審判を記憶にとどめ、そこから学ぶよう求められています。彼岸に関するダンテの報告は、神の裁きが現世の裁きの中断などではなく、むしろ現世の裁きを理想的に履行していることを記録しています。実際、さきほど私が述べたように、ダンテの地獄は亡者たちを己むことなく責めたてて残忍に罰しますが、そのような処遇は当時の裁判のスタンダードにあたるものです。ダンテの地獄には、罪人を肉体的に罰し、異端者や魔女を拷問にかけ火炙りにし、裏切り者を餓死させるなどといったことを至極当然と考える文化や社会が映しだされています。私たちはもちろんこうした行為を唾棄すべきものとみなしていますが、その歴史的な文脈からすれば、こうした行為は倒錯した正義ではなかったのです。

それに対して、レーヴィが証言する現実、彼本人がじかに体験した歴史上の現実です。この現実是我们にこう語りかけています。「この生、この世界において人間は人間に対してこんなことをすることができる」。同時にそれは、私たちがダンテのリアリズムを理解する上できわめて重要なことを示唆してもいます。レーヴィが人間ならざるものたち、温和で無防備できわめて傷つきやすい回教徒たちのことを「溺れるもの」*¹²と呼んでいるのは偶然ではありません。その証拠は彼らの肌身に刻みつけられています。それに対して、生存できた「救われるもの」は、強く抜け目がなく幸運な人々で、だからこそ収容

*¹¹ Cit. in Cavarero, *Orrorismo*, p. 60.

*¹² 「沈めるものどもを詠んだ第一の歌 [la prima canzon, ch'è d'i sommersi]」(Inf. XX 3) を参照。

所から生還できたのであり、場合によっては証言することもできたのです*¹³。周知のように、いずれの言葉もダンテに由来しています。ただし、実質的に違うのは、『神曲』では「溺れるもの＝地下に沈められたもの」とは地獄で刑に処される罪人を指し、「救われるもの」は煉獄、あるいはすぐに天国へと昇っていく霊であるということです。それゆえ、レーヴィが用いる語彙はダンテのそれを逆転させているのです。そこから、いかにナチスの「正義」が善人を裁き悪人に報いたかが痛烈なアイロニーを込めて際立ってきます。収容所は無用の暴力に抵抗する暇すら収監された囚人に与えません。彼らを効率よくただちに罰するために、収容所は地獄の構造を利用しました。その意味で収容所は地獄の悲劇的なパロディなのです。

とはいえ、私たちが地獄と収容所を比較する上で押さえておくべき基本的な論点はもうひとつ別にあります。ダンテの地獄では、いささかも個性を奪われることのない亡者たちは、逆説的にもみずからの存在の真価を発揮するのです。彼らは人道に悖る扱いを蒙ってもその性格を寸毫も変えることはありません。それどころか地獄は、亡者たちの名前を抹消したり数字に貶めたりするわけではなく、むしろ彼らの歴史的・心理的なアイデンティティをことさらに浮き彫りにするのです。そのようなやり方は、彼らに科された苦痛や屈辱以上に、彼ら各々にとっては罰となり存在論的な恐怖となるのです。それに比べて『これが人間か』は、苦痛の効果についてきわめて異なった証言を提供しています。収容所内にあつて「溺れるもの」は、存在として抹殺されるはるか以前に、すなわち、文字どおりわずかばかりの灰と化すはるか以前に、個人として抹消されてしまいます*¹⁴。有罪判決を下される過程で、収容所は、フォーコーのパラダイムでは予見されていなかった段階、すなわち「人間ならざるもの」という段階をつくりだしています。その段階になると人間それ自体はいまだ肉体としては存在しますが、もはや人間ではなくなっています。したがって、秩序だった組織的な殲滅という終幕を飾るのにふさわしい存在になるわけで、もはや看守は一抹の罪悪感すら抱かずにそこに送り込むことができるのです。かつての死刑執行人には未知のこのような段階は、ナチスの大量殺戮計画にとってはすこぶる有用なものでした。計画的な大量殲滅を効率的かつ経済的に遂行する上では避けて通るわけにはいかない必須の手続きだったのです。しかしながら、ナチスの国家機構にはいくら躍起になって虐殺をくりかえしても虐殺し尽くせない犠牲者たちが残ることになります。人間をひとたび無感覚にすると、死刑執行人はその腕前を揮うべき無数の新しい犠牲者を発見するのです。

*¹³ この点に着目した研究に以下の論文がある。Valeria M. M. Traversi, *Per dire l'orrore: Primo Levi e Dante*, «Dante. Rivista internazionale di studi su Dante Alighieri», V, 2008, pp. 114-115.

*¹⁴ 「伝統的な地獄のイメージでは、地獄に堕ちた者たちはその個人としてのアイデンティティを保ちつづけている。ところが逆に、収容所の地獄では、こうしたアイデンティティこそが徹底的に抹消されてしまうのである」(Ivi, p. 60)。

こうしたことをダンテは理解していませんでしたし予見していませんでした。苦痛、暴力、残虐、悪が人間を人間ならざるものに逐いやってしまうほど人間を鈍磨させてしまうことは彼にはわかりませんでした。レーヴィと収容所の関係をダンテと比較してみても暗黙のうちに私たちが気づくのは、ダンテのリアリズムがいわば悪意とは無縁のものだということです。拷問、虐待、略奪は、心身の合一としての人間を解体し、この合一の実現を阻むものです。けれども、レーヴィの著作からはもうひとつ別の示唆も与えられます。ダンテの地獄の特徴はレーヴィの収容所のそれとはまったく様相を異にしています。つまり、ダンテの地獄はひとつの芸術作品であり詩であるということです。ピノッキオの囲炉裏でぐつぐつ煮え立つ鍋のなかにも、美味しそうな食べ物が皆無というわけではないのです。

さてここで、スタイナーの第二の着眼点に話を進めることにしましょう。すなわち、収容所はダンテがその最上の例を提供しているような幻想を具体的に実現したものであるという論点のことです。ダンテの『地獄篇』のテキストの記憶は『これが人間か』の随所に顔を覗かせています。とはいいいながらも、こうしたテキスト間の関係は物語を執筆する時点で生まれるのであって、その物語で語られた出来事をレーヴィが体験した時点ではなかったと仮定しておくのももっともなことです^{*15}。しかし、このルールには大きな例外がひとつあります。『地獄篇』のエピソードがレーヴィによって語られた物語の主人公になる場合です。つまり、「オデュッセウスの歌」と題された有名な章のことで、このタイトルは『これが人間か』の第11章と『地獄篇』の第26曲にひとしく冠することのできるもののなのです。1944年6月のさるのどかな明るい朝、レーヴィは、^{コマンド} ^{ビコロ} 労務班の連絡係ことジャンと収容所の各台所からスープ鍋を取り立てに向かおうとしているときに、ダンテのオデュッセウスについて憶えているだけのことをジャンに暗誦し説明しはじめます。つまり、「誰もいない [sanza gente]」世界 [Inf. XXVI 117] を求めてヘラクレスの標柱を越えたオデュッセウスと彼の数少ない仲間が、大海原の只中に褐色の高い島を認めて歓喜したのも束の間、「神の御意のままに [com' altrui piacque]」 [Inf. XXVI 141] 難破した一連の顛末のことを説明したのです。

ダンテによるオデュッセウスの回想はレーヴィの心を深く感動させます。その回想は、^{エッセンホーレン} 食糧運搬——食糧の配給を受け取りに行く屈辱的な強制労働——を誇らしい旅路に一変させます。そのなかでレーヴィは自分の人間性を再発見し、熱中しているほんの束の間だけ収容所の恐怖を忘れることができるのです。

.....
* 15 この点については Giovanni Falaschi, *Ulisse e la sfida ebraica in «Se questo è un uomo» di Primo Levi*, «Italianistica», XXXI, 2002, pp. 123-131 を参照。きわめて鋭い洞察に富んでいるのは、レーヴィのオデュッセウスについて触れる箇所である。レーヴィにおけるダンテの記憶については、末尾にこれまでの文献一覧を付した前掲の論文 Valeria M. M. Traversi, *Per dire l'orrore*, pp. 109-125、そのうちオデュッセウスの挿話については 116-117 頁を参照。

周知のように、いっこうに収まる気配のない燃えさかる炎のなかに囚われたダンテのオデュッセウスは、ひどい苦痛に喘いでいます。ダンテはそのことを次の第 27 曲の冒頭になっ**て**はじめてそれとなくほのめかしているだけです。明らかに、レーヴィが自分に重ね合わせているのは、苦痛に呻くオデュッセウスではなく、妻子、父、祖国をひっくるめたすべてを差し置いても、あらゆる境界や障壁を突破していく自由を最優先にするオデュッセウスです。レーヴィが感極まって暗誦するのは、「しかし私は深く広き海原へと漕ぎ出した [ma misi me per l'alto mare aperto]」[*Inf.* XXVI 100] という句です。つまり、束縛を断ち切って「障壁の向こう側に自分たちを投じる」という考え、どこまでも果てのない大海の幻が彼の心を強く揺さぶるのです。

レーヴィの記憶は途切れがちです。一部の詩句は憶えていますが完全な節としてつながりません。テキストのあちこちに脱落があって、レーヴィはその穴を埋めることができません。しかし彼はすぐさまこのうえなくはっきりと思い出します。オデュッセウスが彼の仲間たちに向かって滔々と語るその短い演説の山場にあたる三行詩です。

さあ、勤勉なピコロよ、耳をそばだて心を開いておくれ。君に理解してもらわなくては。

お前たちの起源を考えてみる
お前たちは獣のごとく生きるために造られたわけではない
徳と知を追い求めるために造られたのだ

Considerate la vostra semenza:
fatti non foste a viver come bruti,
ma per seguir virtute e conoscenza [*Inf.* XXVI 118-120]

まるで私自身も初めてそれを耳にしたかのような感覚だった。喇叭の高らかな響きのようでもあり、神の声のようでもあった。しばしの間、私は自分が誰でどこにいるのかを忘れていた^{* 16}。

レーヴィは何を耳にしたのでしょうか。彼が落ち込んだ残酷な眠りから彼を目覚めさせた高く鳴りわたる喇叭の響きとはいったい何だったのでしょうか。いまや新たな活力と目を醒めるような説得力で彼の心を震撼させているのは「お前たちの起源を考えてみる」というその詩句です。「お前たちの起源を考えてみる」とは「お前たちが誰で、どこから来たのか、なにから造られたのかを考えよ」ということであり、いいかえるならば、お前たちが人間であり、動物のように生きるためではなく、徳と知を追求するために人間として造られた

.....
* 16 *Se questo è un uomo*, in *Opere*, I, p. 109 [前掲書 138 頁] .

ことを考えよということです。すなわち、人間であるとは、善を選んで悪を選ばず、徳を選んで悪徳を選ばず、公正を選んで不正を選ばない道徳的な生を有することであり、知的な生、すなわち理性や論理が命じるルールに則って探求し追求し分析し吟味し検討すべく積極的に働きかける精神をもつことなのです。こうしたことは、仲間たちに向けて語ったオデュッセウスの言葉をレーヴィがふたたび口にしたまさにそのときに彼に聞こえていたものなのです。レーヴィが自分が誰でどこにいるのかを忘れてしまうのは、その言葉のせいではありません。むしろその言葉のおかげで彼は、解体されてしまうことを危惧していた人間をみずからのうちに再発見するのです*¹⁷。この詩行を諳んじているうちに、彼は自分の抑え込むことのできない人間の尊厳を主張し、彼を迫害する者たち全員に叛旗を翻します。「スープ鍋を運搬するための2本の角材を背負ってこんなことを」あえて「語り合う」者の身振りは、何ともいえない崇高な身振りで、そうした身振りは、無知よりも知を、閉じた地中海よりも深く開かれた大海を、懐かしのイタケーよりもヘラクレスの標柱の彼方に垣間見える褐色の山を好むオデュッセウスの身振りを思わせます。

オデュッセウスが「神の御意のままに」海の大渦に永遠に呑み込まれる場面にさしかかると、レーヴィの感動も最高潮を迎えます。

あたりを取り巻く渦潮もろとも船体を三回転させ
 四度目に^{とも}鰻を高々ともちあげると
 神の御意のままに^{へきき}舳先から渦の深みに沈みこんだ

Tre volte il fe' girar con tutte l'acque
 Alla quarta levar la poppa in suso
 E la prora ire in giù, come altrui piacque... [Inf. XXVI 139-141]

私はピコロを立ち止まらせる。この「神の御意のままに」に耳を傾け理解してもらうことがどうしても必要で急を要することなのだ。明日では遅すぎる。彼か私かのどちらかが死んでしまっているかもしれないし、もう二度と会えないかもしれない。だからそうならないうちに彼に話して説明しておかなければならない。中世という時代について、予見できなかったとはいえ、かくも避けがたい人間の時代錯誤について、さらにまた、私自身がたったいまほんの一瞬だけ直観的に垣間見た巨大な何かについて、そしてできれば、われわれを待ちかまえている運命の理由、われわれがなぜいまここにいるのかという理由について説明しておかなくてはならない……*¹⁸

*¹⁷ Stefano Lazzarin, «Fatti non foste a viver come bruti». A proposito di Primo Levi e del fantastico, «Testo», XXII, 42, 2001, pp. 67-90: 76-80. この論文でも同様の結論に達している。

*¹⁸ Se questo è un uomo, in Opere, I, p. 110 [前掲書 140 頁] .

ここで詩は啓示になっています。レーヴィはあらゆる障壁や限界の「向こう側に」身を投じる願望と欲求と勇気を兼ね備えたオデュッセウスの姿を彼自身と同一視します。だからこそ、時代錯誤にも彼は、自分のあずかり知らない神によって踏みにじられるのです。大海の浪がギリシアの英雄を呑みこみ水底に沈めると、レーヴィはこの英雄だけでなくユダヤ民族全体にもかかわるような何かを直観的に察知します。ここではレーヴィとピコロがこの迫害された民族の代弁者です。レーヴィはそのことをはっきりとは述べていませんが、ある時点で読者は、ダンテのオデュッセウスがユダヤの英雄になっていることに気づきます^{*19}。そして彼の——予見できなかったとはいえ、かくも避けがたい人間の——悲劇は、ユダヤ民族の悲劇になっているのです^{*20}。

ここにいたってレーヴィは、さらにもっと数語の言葉を思い出すためならば自分の分のスープもすすんで提供したことでしょう。この詩句で彼は記憶の穴を埋めることができるし、彼が見たものをひょっとしたらもっとよく見て理解することができるのですから。これらの詩句は、いまやスープそのものよりもはるかに大切なものになっていて、彼の渴望する精神にとっての生きる糧なのです。しかし、旅は終わり、ごくわずかな自由時間で収容所はふたたび閉じられるのです。ちょうどオデュッセウスとその仲間たちの体の上で大海がふたたび閉じられるように。

* 19 この点についてより詳細な議論についてはあらためて以下を参照願いたい。Falaschi, *Ulisse e la sfida ebraica*, cit., pp. 129-131.

* 20 レーヴィは何を見たのか。彼に衝撃を与えたこの巨大な想念、ユダヤ人の大量虐殺の理由を説明できる一瞬の直観とはいったい何だったのか。『これは人間か』の若者向けの新版への註（トリノ、エイナウディ社、1986年。ただし、序言と註を付した初版は1973年）のなかで、レーヴィは以下のように書いている。「筆者にはオデュッセウスの難破と囚人の運命のあいだにはぞっとするような類似が予感されるように思われる。つまり、いずれも皮肉なかたちで「罰せられ」ているのだ。オデュッセウスは伝統の壁を突き破った廉で、囚人は圧倒的な力に果敢に立ち向かったという理由で。当時、その力とは、ヨーロッパにおけるファシスト体制だった。さらに、ドイツの反ユダヤ主義の、したがって収容所のさまざまな原因のひとつには、ヨーロッパのユダヤ思想の知的な「炯眼」に対する憎悪と不安があった。2人の若者は、オデュッセウスの仲間にも同じような炯眼を感じとっている。そのとき2人はその炯眼を代弁し継承していることに気づく」〔前掲書255頁〕。ユダヤの知性に対するナチスが抱く侮蔑の動機は、オデュッセウスの章の冒頭に遡る。そこで、カポのアレックスがユダヤ人の「ぼろぼろの飢えた」化学者を嘲笑しているところが活写されている。「頭の賢い博士さんたちよ——彼らが食糧の配給に手に手に飯盒を差し出して殺到するさまをみてはこのカポは毎日高笑いをしていた」。しかし、学生が活用し消化するには、簡略化されすぎたつましい説明である。実際、ダンテによるオデュッセウスの難破のうちにレーヴィが見た現在進行中のものとは、私見では、「神々の嫉妬」にほかならない。この嫉妬がいまやナチスの手によってユダヤ民族とその知性をめがけて叩きつけられているのだ。オデュッセウスの難破譚をめぐろうとした悲劇の観点からの解釈は、オデュッセウスの歌の冒頭部分に依拠している。ここでは、地獄の第八囊を見て、ダンテはみずからの才智を抑えようと心に決める。「徳に導かれずに才走らぬよう／つねにもまして才気を慎むことにしよう。／幸運の星かそれよりも善き神の恩寵のおかげで、天賦の才に／恵まれたこの身だ。よもやその才をみだりに用いてみずからこれを棄ててしまうことがないように [perché non corra che virtù nol guidi; / sì che, se stella bona o miglior cosa / m'ha dato 'l ben, ch'io stessi nol m'invidi]」(Inf. XXVI 22-24)。

これが人間か考えてみてほしい [Considerate se questo è un uomo]——レーヴィはアウシュヴィッツの報告の劈頭でそう書いています。ここでオデュッセウスがその見事な三行詩を書き始めたのと同じ動詞がわざわざ踏襲されているのもけっして偶然ではありません。いまやおそらく私たちは、レーヴィの本のタイトルがいかなる深淵から派生してきたのか、このタイトルはいったい何を意味し、この本だけでなく、アウシュヴィッツの地獄の経験をも理解する真の鍵となっているのはなぜなのかを洞察できるでしょう。オデュッセウスは語ります。「お前たちの起源を考えてみる [Considerate la vostra semenza]」と。つまり、お前たちが人間であって獣ではないということを考えよ、ということです。レーヴィは私たちに問いかけます。いったいどれだけの苦痛を受け、どれほど獣と化しても、人間はみずからの人間性を保つのかどうか、と。彼はまだ人間であるか、

泥まみれで働き
休息を知らず
パンのかけらを奪い合い
号令ひとつで殺されるものが

まだ女であるのか、

髪を刈られ名も奪われ
もはや思い出す気力も失せて
目も虚ろに冬越えの蛙のごとく
体の芯まで凍えきっている女が

まさしくそうだ、いまや私たちはこのレーヴィの問いにそう答えることができるでしょう。彼らの心のうちでふたたび響く数行の詩句が彼らの人間性を証しだてるかぎり、これは人間でありこれは女である、と。結局、これらの詩句は、死してなおも彼らに救済を保証する唯一のものであるでしょう。

1987年にレーヴィはつぎのように書きしるしています。

私にとって、文化は有益だった。いつもではないが、時折、おそらくは地下の思いもよらない徑路を伝ってだが、私には役立ったし、たぶん私を救ってくれたのだろう。『これが人間か』の「オデ

ユッセウスの歌」の章を40年ぶりに再読した。[……]とてかく、「かつて……こともない [non ne avevo alcuna]」を結句^{*21}までつなげることができるためなら毎日のスープを差し出してもいい」と書いている箇所、私は嘘をついていたわけではないし誇張していたわけでもない。虚無から記憶を救い出すためなら、ほんとうにパンとスープを、つまりは血を差し出したことだろう。いまでは、印刷物というたしかな支えのおかげで、好きなときに無償で記憶を新たにすることができるので、その価値は薄れてしまったように思うが。

しかし、当時そこでは、その価値には測り知れないものがあった。記憶のおかげで私は過去との絆を取り戻し、過去を忘却の淵から救い出し、私のアイデンティティを鞏固にすることができた。記憶は私に確信させた。たとえ日々の困窮で締めつけられても、私の精神はけっして働くことを止めはしないということを。私と私の話し相手の目には、記憶は私に味方していた。記憶は私に束の間の休息を許してくれた。とはいえ、ぼんやりするわけではなく解放をもたらす特別な休息だ。一言でいえば、自分自身を再発見する方法なのである^{*22}。

それゆえ、まさしくここに私たちは、ダンテの地獄と絶滅収容所の類似についてのスタイナーの所見にレーヴィが出した答えを見出すのです。レーヴィはその経験談として『地獄篇』の断片群をつなぎ合わせていますが、それをスタイナーが示唆したのは正反対のモチーフに仕立てています。レーヴィにとって、ダンテの『地獄篇』は中世や文学における収容所の祖先ではなく、ことによると、その解毒剤なのです。詩で歌われているように、ダンテの『地獄篇』に、レーヴィは恐怖への麻痺からの自由、収容所がしでかす人間の解体過程に抵抗する勇気と力を見出しているのです。

＊

アウシュヴィッツの恐怖からすでに約30年経って、もしある大学生が『地獄篇』を研究したとしたら、オデュッセウスの歌をレーヴィのようにもっぱらポジティブに解釈することには、たんなる当惑だけでは済まされない感慨を懷いたことでしょう。結局のところ、オデュッセウスの言葉は、あいにく困ったときの慰めとなるわけでも救いとなるわけでもないということです。今日のわれわれにとって、レーヴィの解釈のもっとも人目を惹く側面のひとつは、彼が原典となるテキストをその文脈から徹底的に切り離している点にあります。レーヴィはダンテの地獄を電報文のようにほのめかしています（「地獄はどのよう

.....
* 21 『地獄篇』第26曲第136-138行「私たちは歓喜したが、歓びはただちに嘆きに一転した。／この未知の土地から一陣の竜巻が捲き起こり、／舳先の一角にぶつかった [Noi ci allegrammo, e tosto tornò in pianto; / ché de la nova terra un turbo nacque / e percosse del legno il primo canto]」。

* 22 *I sommersi e i salvati*, in *Opere*, II, pp. 1100-1101 [前掲書 160-161頁]。

な配置になっているのか、応報とは何か」[Come è distribuito l'Inferno, cosa è il contrappasso]。しかしながら、彼はすぐさまオデュッセウスの議論に話題を転じるのであって、この英雄を包み込む炎や、その罪——ウェルギリウスの説明によれば、そのせいで他人を欺く者たちの獄の第八囊^{ボルジャ}で罰せられている——についてくどくど語っているわけではないのです。『これが人間か』では、オデュッセウスの歌のうち、最後の航海の物語しか登場しません。文脈はすべて無視され、あえてためらわずにいえば「削られて」いるのです。というのも、『地獄篇』に登場する偉人たちをコンテキストから剥がすというやり方は、1930年代の（1940年代も1950年代ですらも）イタリアの学校ではごくあたりまえになされていたことだったからです。むしろはるかにありそうなのは、レーヴィがオデュッセウスの最後の航海の話だけを記憶していたのは、まさしくその話が、学校で暗記させられた箇所——85行から142行までの「摘要」^{メダリオーネ}——だったからだというものです。オデュッセウスの3つの策略を彼の最後の冒険からはっきりと切り離して考えるこうした解釈は、ベネデット・クローチェの比較的近年の複雑な解釈（「気高い罪ながらも罪深き悲劇の英雄」オデュッセウス）とはいわないまでも、フランチェスコ・デ・サンクティスの古典的な解釈（「コロンブスの先駆者」、「悪の囊」^{マレボルジェ}〔訳註〕9の獄に分かれるダンテの地獄の第八獄は10のマレボルジェに分かれていて、オデュッセウスはディオメデスとともにその第八囊^{ぬかるみ}に在る〕の孤高の偉人」、「泥濘に築かれたピラミッド」、どんな「罪も徳になる」人物）とは完全に足並みを揃えていました*²³。

しかし選択のかなり偏ったこうした解釈のなかにあっても、レーヴィが記憶しているエピソードの断片は、気高く、英雄的で、不屈の探検家としてのオデュッセウスの肖像を描くには有効なものです。事実、テキストの内容が、こうした人物像に罅を入れたり邪魔したりするような要素を匂わせるにつれて、レーヴィの記憶は薄れていきます。レーヴィの全神経は、「障壁の向こう側」、「ヘラクレスの標柱の彼方」へと開かれた見渡すばかりの自由な地上へと注がれています。彼を熱狂させ仲間のピコロに伝えようとしたイメージとは、自由を謳歌する高潔なオデュッセウスのイメージなのです。彼は、あらゆる制約や束縛や障壁を越えた世界を探索・踏査すべく、そこへと自由に漕ぎ出します。レーヴィによれば、それはアウシュヴィッツの被抑留者である彼ら自身にはわかりすぎるほどわかる衝動なのであり、そうした衝動に駆られるほど、彼らは生きていること、人間であることがわかるのです。しかし、このことから必然的に、地獄にいらながらも、レーヴィのオデュッセウスは「溺れるもの」ではなかったということになります。オデュッセウスは悲劇の英雄です。たしかに敗北を喫しはしましたが、服従しているわけではありません。そして古代キリスト教の殉教者と同じように、敗北したように思われたときに勝利を収めたのです。

*²³ 以下を参照。Francesco De Sanctis, *Storia della letteratura italiana*, a cura di Gianfranco Contini, Torino, UTET, 1968 [フランチェスコ・デ・サンクティス『イタリア文学史』池田廉・在里寛司訳、現代思潮新社、1970/1973年]；Benedetto Croce, *La poesia di Dante*, Bari, Laterza, 1922³, p. 98.

宗教は違えど挑発の身振りは同じなのです。

ここにはある逆説が働いています。苦痛にみちた現実が人間を鈍感にし殺害するのに対して、文学は救いになるのです。収容所における現実の「回教徒」、「溺れるもの」に、レーヴィは、凋落はしたが屈服はしなかった英雄という虚構のイメージを対置しています。それは文学にすぎないといわれるでしょう。たしかにそのとおりです。アウシュヴィッツでの1年間の体験記によって、レーヴィは、それと意図することなく、文学のリアリズムがどれほど抽象的で非現実的かということを示すことになりました。同時に彼は、私たちの人間性の生存のために文学が果たすべき唯一の役割をことさら明らかにすることになったのです。

＊

こうした楽観的な言葉を述べて、ここで結びとしたいと思います。ただ、それでは私としても誠実さに何ひとつ欠けるところがないとはいいきれないでしょう。レーヴィの鷹揚な解釈は、歌全体と対立するのはもちろん、彼の経験した現実とも明らかに衝突しているのです。それは、理性的というよりも感情的な解釈で、『神曲』の当該の一節、アウシュヴィッツでのあの朝の「当時そこで」という歴史的な時点にとって都合のいいものです。あらゆる宗教と同様、残念ながら詩の宗教にもまた善き信徒と悪しき信徒がいます。たとえば厄介なことになるとしても、絶滅収容所を構想し組織した人々が芸術や詩のきわめて感性に富んだ愛好家だったということ、そして、大いにありうることで、彼らもまた、レーヴィにいたく感銘を与えたダンテの詩を読んで感動したであろうということを忘れるわけにはいきません。さらにつけくわえれば、絶滅収容所から生還を果たすことのできたレーヴィ自身、あらゆる文学を自由に支えにすることができたにもかかわらず、最後は、彼の記憶からの生還を果たすことができなかったという点も忘れるわけにはいきません。

とはいえ、歳月が経つにつれて、ダンテの『地獄篇』についての当のレーヴィの判断はますます複雑になっていきます。明らかにダンテを再読し沈黙考しながら、レーヴィは、1987年のあるインタビューで収容所と地獄のあいだの不穏な類似を指摘しています。収容所で「ナチス党员が行なう多くの行為は、自分自身にも苦痛を加えたいという欲望の反映にほかなり」ません。ちょうどこれと同じように、『地獄篇』では、「溺れるもの」を傷つけるために加えられる「無用の暴力」という事例が起こっています。そこで彼が提示する例は「ダンテが地獄に堕ちた罪人のひとりに残酷なふるまいをするあるエピソード」*²⁴なのです。ダンテは、まず先に罪人に身の上話を語らせます。この罪人の目は涙を流すこ

.....
* 24 私の判断では、当然のことながら、レーヴィは、その対談のなかで登場人物／話し手としてのダンテと人間としてのダンテを区別していない。

とができないほど氷で塞がれていて、ダンテは話し終わったら氷を剥いでやるという約束をするのですが、結局は、その約束を反故にしてしまうのです。これは修道士アルベリーゴの挿話（*Inf.* XXXIII 109-150）のことです。この挿話は「奴には無礼にふるまうのが礼儀にかなうからだ [e cortesia fu lui esser villano]」という有名な一句で締めくくられています。アルベリーゴにした約束を守らなかったとダンテがぬけぬけと明言するこの句を、レーヴィは正当にもつぎのように説明しています。「いいかえれば、自分を残酷に見せることがダンテの義務だったのです」と。さらにこう続けます。

これと似たようなことがドイツで起こったのだと思います。熱心なカトリック信者であるダンテが、いかなる法にも訴えることができず苦痛を強いられている地獄の亡者に対して味わった感情は、おそらくナチス党員がユダヤ人に対してとった立場と似通っていたのです。つまり、ユダヤ人が最大の責め苦に耐えるのは当然だ、と彼らは感じていたのです*²⁵。

この発言の日付は 1987 年です。これはすでに述べたように、収容所のなかでダンテの詩句が「私に束の間の休息を許してくれた。とはいえ、ぼんやりするわけではなく解放をもたらす特別な休息だ。一言でいえば、自分自身を再発見する方法なのである」とレーヴィが書いたのと同年にあたります。このインタビューではむしろ、ダンテの亡者は実際に人間ならざるものとして扱われています。これはほんのすこし前に述べたこととは逆で、収容所に対する解毒剤であるというのとはかけはなれています。ここでは『地獄篇』は中世のモデルとして現われ、カトリック信者ダンテの宗教的な熱意は、ナチスの護衛兵の熱意と変わるところがありません。生前最後の年である 1987 年のレーヴィにとっては明らかに、ダンテのうちに二つの衝動が共存していたのです。地獄を遁れ、徳と知を求めて命を落としながらもその人間性を謳歌するオデュッセウスの衝動と、地獄の無慈悲さを受け入れて地獄の秩序に屈するダンテ自身の衝動が。

（2013 年 5 月 26 日京都大学大学院人間・環境学研究科にて講演。

時間の都合上、後半部分のみが読み上げられた。）

.....
* 25 *Un'intervista con Primo Levi di Risa Sodi* («Partisan Review», IIV, 1987) からの引用。現在は Primo Levi, *Conversazioni e interviste 1963-1987*, a cura di Marco Belpoliti, Torino, Einaudi, 1997, pp. 234-235 に所収。

※ 引用箇所については、既訳のあるものではできるかぎり参照しデータを提示したが、訳文は文脈に応じて変更した箇所がある。